

麗に灯に映ゆる、浪路遙か南蛮船に積まれて来た器を見逃さなかつた。

やがて静かな句作に入る。席題五題は何れも見つ、味ひつ、ある席上の即事である。そこへ又花醉氏が見えて半ばから句作に加はつた。句作を終つて選る、酒と白酒で大分い、色になつた。春氏の披講が済んでから移つた各自の批評が了つた頃は、いつか夜も更けきつて花醉さんの手で継ぎたされた雛壇の三度目の蠟燭も残り少なに瞬いてゐた。最後に今宵の節句の主つゆ様のお望みで、銘々の箸袋に今夜の句を一句づつ認めて、懇ろに送られて玄関を出ると、お心づかひの自動車が明るい月光を浴びて駐つてゐた。

一つ／＼母思ひ出づる雛かな 花 醉

壺焼の角も焦げよの焰かな 稻 村

草に入る日に開けあるや雛の窓 樹 人

雨晴れて尚樋を落つや桜餅 よしを

夜半の灯に飾り了せし雛かな 長頸子

(吸物)蛤のなか／＼熱し二つ澄む 苔雨

雛の灯に影つくり居て句作かな 徂 春

節句の主に代りて

白酒や酔はよき風月もあり 水 巴

(大正7年・曲水2―11)

信 心

善八老人の蓄財が愈々五十万を越すと、老人は年来の願望だつた、信仰する仏を祀る御堂を邸内へ建立する事に着手した。

広い静かな邸内から聞えて来る地突き響の音に、近隣の人々は何事が始まつた事かと最初は奇異の耳を澄ませたが、やがてそれが老人の御堂建立と判ると「あの我利／＼親父が：」と嘲笑した。実際、世間の眼から見れば、相当な税金をお上へ納めてゐる以外には、金を蓄める一事に執着した善八老人の所為は、人並外れに違ひなかつた。老人の節儉は程を過してゐた。自分の食膳の片身食べ残した小魚を、そのまゝ、客の膳に薦めて平気でゐた。老人の座右の火鉢にはいつでも小さな鍍が焼べてあつて他から来た手紙の後先の余白は剪取つて継ぎ合せて鍍で糊を乾かして、直に其れに返事が認められた。兄妹二人の子達も、勿論金の為から老人の怒に触れて別居させられ、幾年になつても嘗て老人の家の閩を越えた事はなかつた。

一年二年、御堂の工事は静かに進んだ。その間とても老人は決して財産を殖す事は忘れなかつた。さうして頑丈な手から手馴れた算盤を離した暇には、冷たい看経の室に閉じ籠つて小さな木魚を叩きながら、一心に念ずる御仏の唱名に余念がなかつた。老人の看経の室は、薄暗い邸内でも殊に暗い冷い処にあつた。其処には、信仰にかけては何物も顧みない老人が、大金を投じて諸処の寺々から蒐めた古い蝕んだ佛像などが、処狭いま